

歌の世界に見る光と影の世界

齋藤芽生さんの作品世界には

昭和四十年代の歌謡曲のようなディープな人間模様がある。栄光と挫折、都会のきらびやかな光と影、男と女の愛憎の「コマ」。これまでどんな音楽に影響を受けてきたのか話を聞いた。

美術家
齋藤芽生

●さいとう・めお 1973年東京都生まれ。東京藝術大学准教授。2010年「VOCA展2010」で佳作賞と大原美術館賞を受賞。個展・グループ展を多数開催するとともに、『四畳半みくじ』（芸術新聞社）などの著作も手がける。

深くて広い昭和歌謡の世界

人によって「昭和歌謡」という言葉から喚起されるイメージや歌手、時代はそれぞれだと思います。私は一九七〇年代に生まれて八〇年代に育ったので、当時の歌謡曲の影響を強く受けていると思いますが、でもそれが「昭和歌謡か？」と聞かれる

と少し違うかもしれません。当時は特に「昭和歌謡」という意識で聞いていたわけではありませんでした。

大人になってから伊東ゆかりや西田佐知子、藤圭子など、自分が生まれる前の時代の歌謡曲を聞くようになると、子供のころに聞いていたアイドルの歌謡曲とはずいぶん違う世界だと思いました。伊東ゆかりは『小指の思い出』（一九六七年）を、当

時は歌詞の意味がよく理解できないまま歌っていたと聞いたことがありますが、それもそれで、いまの若者が「よくわかんない」というのともニュアンスが違うように思いますね。伊東ゆかりはこの曲の発表当時、まだ二十歳になるかどうかぐらいの年齢で、男女の恋の喜びやとまどい（おそろく）気がついてはいないながらも、見て見ぬふりをしているよう

な危うさがあったのではないでしょうか。それが、昨夜の逢瀬を思い出す女性の心を描く歌詞の世界とのギャップになって、聞き手のイメージネーションをふくらませていた気がします。

歌い手のイメージと歌詞の世界のギャップといえば、佐良直美の『いいじゃないの幸せならば』（一九六九年）なんかもそうですね。おそろく二股をかけているであろう女性が「人が

なんといおうと、いまが幸せならいいじゃないの」とけだるく歌うのですが、ボーイッシュで中性的な雰囲気、佐良直美が歌うと、歌詞の生々しさが中和されてしまう。でも、それがかえってよかつたんじゃないかと思えます。彼女じゃなかったら、女性のしたたか度で勝手な部分が強調されて、まったく違うイメージになってしまったでしょう。そうすると、ただの身勝手な女性で終わってしま

う。

この曲、私のカラオケの十八番でもあるんですが、曲に合わせて流れる映像がこの退廃的な歌詞にまったくそぐわないことがありました。健全で幸せそうなカップルが映し出されて、「いまが楽しければそれでいいじゃん！」みたいな、歌の世界とは相容れない軽い雰囲気になっていて、「こんなイメージじゃないのになあ」と残念に思ったことがあります。いまはどうなのでしょう。機械の種類によって映像が変わると思いますが、曲の雰囲気壊さないものだと思います。

時代への違和感から歌へ

私が思春期を過ごした九〇年代初頭は、KANの『愛は勝つ』（一九九〇年）、大事MANブラザーズバン

いいじゃないの幸せならば (1969)

作詞 岩谷時子
作曲 いずみたく
歌 佐良直美

あのとき あなたと くちづけをして
あのとき あの子と 別れた私
つめたい女だと 人は云うけれど
いいじゃないの 幸せならば

あの晩 あの子の 顔も忘れて
あの晩 あなたに抱かれた私
わるい女だと 人は云うけれど
いいじゃないの 今が良けりゃ

あの朝 あなたは 煙草をくわえ
あの朝 ひとりで 夢みた私
浮気な女だと 人は云うけれど
いいじゃないの 楽しければ

あしたは あなたに 心を残し
あしたは あなたと 別れる私
つめたい女だと 人は云うけれど
いいじゃないの 幸せならば